ヤスクニ通信　No.278　2023 年 6 月 17 日　例会　毎月第3金曜　7:00～9:00pm（休日の時第 4 金）
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・星出卓也（Tel/Fax042-458-0251）
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP　http://yasukuninotsudoi.christian.jp/

ヤスクニ・レポ　278

繰り返される琉球処分

星出卓也（日本長老教会西武柳沢キリスト教会牧師）

■琉球処分の始まり

琉球処分の始まりは 16 世紀に遡ります。1429 年から沖縄は「琉球王国」という独立した国でした。16 世紀から琉球と近い薩摩藩（現在の鹿児島）の島津氏は、貿易のために日本に来る琉球船を統制下に置き、豊臣秀吉の命令と称して琉球王国に兵糧米の負担を命じるようになりました。1609 年に薩摩軍は琉球王国に侵略、薩摩軍の近代兵器の前に琉球は制圧されます。以後、琉球王国は薩摩藩の付庸国となります。1868 年の明治政府確立の後、廃藩置県が行われ、琉球王朝は強制的に廃止され、中央から派遣される行政官から中央集権体制に力ずくで組み込まれ、1879 年に沖縄県となります。政府は沖縄で教育制度をスタートし、徹底したヤマト化、皇民化教育を行いました。沖縄の言葉を用いることを禁止する「方言撲滅運動」を徹底し、学校の中で沖縄方言を使った子供には、罰として「方言札」を首にかけて見せしめにするという沖縄文化を否定する政策をとりました。沖縄に派遣される行政官である松田道之の肩書は「琉球処分官」でした。島津藩の侵略から 270 年後に国そのものを奪っただけでなく、沖縄の文化も言語も奪い日本人化を進めましたので、それはまさに「琉球処分」だったのです。

■第二、第三の琉球処分

その後も「琉球処分」は延々と続くことになります。次なる処分は 1945 年の沖縄戦です。沖縄戦は市民の 4 人に 1 人が死ぬ悲惨なものとなりましたが、その経緯はまさに日本の捨て石にされた第二の「処分」でした。迫りくるアメリカ軍に対して 10 万人の日本軍が沖縄に配置されましたが、日本軍の使命は、防衛ではなく時間を稼ぐことでした。やがて来る「本土」決戦の準備のために出来るだけ時間を稼ぎ、そのために沖縄を犠牲にする。「本土」防衛とは言っても、防衛する「本土」の中に沖縄は除外されました。「本土」決戦の準備の具体的な内容は、松代大本営の建設でした。時間稼ぎが使命でしたので、日本軍は本拠地であった首里で米軍に総決戦する道を選ばず、市民たちが避難した南方へと撤退を始めました。そのために市民が巻き添えになる泥沼の戦いとなりました。日本軍は沖縄の住民を守りませんでした。守るどころか、彼らが避難している洞窟を軍のために取り上げ、砲弾の雨が降る中に市民たちを追い出しました。兵士のみならず市民にも米兵の捕虜になることを禁じ、自決を命じます。そのために起こった集団自決は悲惨極まるものとなりました。4 月に始まり 6 月に終わる沖縄戦は、「本土」防衛のため、沖縄を犠牲にする、第二の琉球処分だったのです。

処分は二回目で終わりません。敗戦から 7 年後の 1952 年に日本は独立をします。しかしその独立は沖縄をアメリカの占領下に置くという条件を呑んだ独立でした。米軍に土地を徴用され、生活の基盤である土地を失い、米軍関係以外の仕事にはありつけない状況に置かれ、多くの女性が米兵相手の仕事に取り込まれる。日本が独立に沸いた裏には、沖縄を切り捨て、さらなる 20 年間の占領の苦役を沖縄に強いた、沖縄を犠牲にした独立でした。

■沖縄に米軍基地を押し付けた日米安保条約

現在、沖縄の面積の 10%を米軍基地が占めて、日本にある米軍基地の 70%が沖縄に集中しています。戦闘機による騒音はすさまじいものがあり、近隣の住民は、安眠はおろか通常の生活も阻まれるほどです。米軍ヘリコプターの墜落事故に巻き込まれる事件は多く、米兵による婦女暴行事件は後を絶ちません。しかも日米地位協定によって米兵がどんなに犯罪を行っても、日本の警察は取り締まる権限がありません。基地に逃げ込み、アメリカに送還されてうやむやになった事件は数えきれません。日本政府は「遺憾である」と声明を出すだけです。日本の国土面積 0.6%に過ぎない沖縄に、日本の米軍基地の 70%が占めている。これは 1960 年代の日米安保闘争で、米軍の日本駐留に大きな反対運動が起こったことに対応して、日米両政府は日本の「国外」とした沖縄に米軍基地を移転する道を選びました。沖縄以外にあった米軍基地は 4 分の 1 に縮小。沖縄の米軍基地は二倍に拡大。それが現在の沖縄に占める 70%の米軍基地の理由です。「日本は戦後～年間戦争をしない平和国家として歩んできた」と天皇談話は繰り返しますが、冷戦時代、それ以後のアメリカの戦争に、沖縄はいつも巻き込まれてきました。朝

鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、アフガン戦争、イラク戦争・・・。全て沖縄の米軍基地から爆撃機は爆弾を搭載して飛び立ち、爆弾を空にして沖縄に戻ってきました。戦闘機の爆音が鳴りやまない日はない 77 年間を辿った沖縄の「戦後史」は、「戦後史」とは決して言えない戦争に生きた歴史でした。ベトナム戦争時にベトナム人たちは沖縄のことを「悪魔の島」と呼びました。被害者のみならず加害者となることが課された沖縄の「戦後史」でした。

■再び沖縄・西南諸島が攻撃の標的に

普天間基地移設先が辺野古に選定される起こりは 1995 年の米兵による少女暴行事件でした。小学生の少女が米兵 3 人からレイプされるというニュースに、沖縄市民の怒りと嘆きは頂点に達しました。各地で起こる抗議運動に基地の存続が危うくなることを覚えた日米両政府は、翌年の 1996 年に 11 か所の基地を縮小もしくは閉鎖することを明言します。普天間基地の移転は、その政策の一部でした。

民主党鳩山政権は、普天間基地の県外移設を明言した初めての首相でしたが、やがてその主張も「沖縄に甘受してほしい」と変わります。それは以前から計画されていた辺野古への新基地移転をそのまま持続し、恒久的に主要基地を沖縄に置くということでした。「憲法 9 条のおかげで日本は軍隊を持てない。その代り米軍に駐留してもらって「国土」防衛を代わりにやってもらっている。抑止力として米軍駐留は必要だ。」という日米安保容認論が日本では大多数ですが、その「国土防衛」は相手国の攻撃の標的となるリスクを沖縄に負担させる「国土防衛」です。沖縄を含めた西南諸島にミサイル基地を配備し、標的となる危険を担う犠牲を課しての「国土防衛」です。この防衛する「国土」に沖縄は除外され、再び「国土」防衛の捨て石とされています。安保関連問題を日本が論議する時、危険は沖縄に押し付けて、標的となる危険を感じない場所で、「本土」防衛論議が今も延々と繰り返されています。

２０２３年４月２１日例会奨励
ヨハネの黙示録１５章３節「あなたの道は正しく、真実」
星出卓也（日本長老教会西武柳沢キリスト教会牧師）

黙示録 15 章 3 節は、信仰を守り通した勝利者たちの賛美の歌を記しています。「**彼らは、神のしもべモーセの歌と小羊の歌を歌った。**」とありますが、それは二つの歌ではなく、一つの歌です。モーセは「神のしもべ」として神の御心に聞き従い、「子羊」も同様に、父の御心に死に至るまで聞き従いました。十字架にささげられるその時にも、ゲッセマネの園においても、父の御心に完全に服従する道を歩みました。モーセも子羊キリストも、父の御心に服従した同じ歌を持っているのです。

その歌の内容は、「**あなたのみわざは偉大で、驚くべきものです。諸国の民の王よ。あなたの道は正しく、真実です。**」とあります。「**あなたのみわざ**」とは、主の民を救い出す救いの御業のことを特別に指して、それが驚くべき偉大な御業であった、と褒め称えています。エジプトから脱出したイスラエルの民を、エジプト軍が追って来た時、主が彼らを紅海の海の中に沈めて、主の民を救い出されました。その御業を見て、偉大さを褒め称えたモーセの歌が出エジプト記の１５章に記されています。モーセが驚き、偉大さを称えたのも、この主の救いの御業です。そしてガラスの海のほとりに立つ主の御心に服従した聖徒たちも、全く同じ歌を歌って、神の奇しい救いの業に驚き、褒め称えています。

出エジプト記 15 章におけるモーセの時代では、一大国エジプトが向き合う相手でしたが、黙示録 15 章の新約の民が向き合う相手は、「**諸国の民**」と世界中の民に広がっています。それが神を知らない異教の民であろうとも、主は、「**諸国の民の王**」として今も支配しておられます。「**あなたの道は正しく**」とあるように、今もキリストは正義を行い、王の王、主の主として寄る辺の無い者たちのために正しい裁きを行われます。「**あなたの道は･･･真実**」とある「真実」の意味は、偽物やまがい品ではない、本物を装いながらも中身は空っぽな偽物ではないということです。「**あなたの道**」こと、主がモーセやキリストを通して行われた主の救いの御業は、エジプトの呪術師たちがモーセの業を真似して見せたような偽物のまがい品ではなく、まことの救いの業、全能の御力を伴ったもの、神の真実な業です。ガラスの海のほとりに立つ聖徒たちも、苦しみと共に主に従い通す中で、この主の救いの確かさを体験して、その御業を驚きつつ褒め称えているのです。

私たちも、この世の脅かしの中にあろうとも、主の真実な、偽物ではない、確かな驚くべき御力を伴った主の救いの御業を体験しつつ、主の救いの業に信頼し、従い続ける者でありますように。いつも主の御業の偉大さを目の当たりにし、それに驚き、同じ賛美の歌を主にささげる者でありますように。